

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学 校	教 科	種 目	学 年
103-118	高等学校	公民科	倫 理	
※発行者の 番号・略号	※教科書の 番号・略号	※教科書名		
35 清水	倫理703	高等学校 新倫理		

1 編修の基本方針

本書は、教育基本法第2条に示された教育の目標を達成するため、以下の基本方針にもとづき編修しています。

① 教育基本法第2条第1号に関して

▶ 本書では、「私とは何か」「人間とは何か」という根源的な問いを基底として、西洋・東洋それぞれの潮流における先哲たちの思考を過不足なく明確に記述することを通し、高校生が幅広い知識と教養を身に付けるとともに、人間として「よく生きる」ことに自ら思いをめぐらせ、真理を探究する姿勢と豊かな情操、道徳心を培うように配慮しています。

② 同第2号に関して

▶ 本書では、人間の心のしくみやはたらきの学習を通して、自己が他者とは異なる個性的な主体であり、その個性と能力を伸ばして創造性を育むことの大切さを理解する一方で、他者とよりよい関係を築いてゆくことの大切さを共感をもって受けとめ、現代の社会を形成する一員として、自主・自律の精神を培うことができるように配慮しています。

③ 同第3号に関して

▶ 本書では、古代から現代にいたる、東洋・西洋の先哲たちの思考の学習を通して、自己と同様に他者もまた尊厳をもつ個人であること、現代社会は自己とさまざまな他者がともに生きる場であることを理解し、社会の一員としての自己の役割を意識して、よりよい社会の形成のために主体的に参画しようとする態度を養うように配慮しています。

④ 同第4号に関して

▶ 現代社会では、科学技術文明の恩恵を享受する一方で、地球規模の環境破壊が引きおこされ、人間自身の生命も深刻な影響を受けるようになっていきます。本書では、生あるすべての存在の一環として人間をとらえる視座のもと、現代の倫理的な諸課題を自己の課題として受けとめ、主体的に思考しながら、生命を尊び、環境の保全に寄与する態度を養うように配慮しています。

⑤ 同第5号に関して

- ▶ 西洋近・現代社会の価値観を根柢に成立した現代日本の社会には、アジア諸国の伝統につながる考え方や、西洋ともアジアとも異なる考え方がふくまれています。本書では、日本の先人たちが外来文化に学びつつ、豊かな思想的・文化的伝統を形成していったことの学習を通して、日本と同様に固有の文化・伝統を有する人々を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うように配慮しています。

2 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
序	人間とは何か	
	冒頭に提示した「私とは何か」「人間とは何か」という問いが、自己への問いであるとともに、古来、多くの先人たちが向き合ってきた普遍的な問いでもあることをふまえ、この問いへの考察を重ねてゆくことを通して、真理を探究する態度を養おうとしています（第1号）。	●全て 4～6ページ
第1編	現代を生きる自己の課題	
第1章	心のしくみとはたらきの学習を通して、自己が他者とは異なる個性的な主体であることを理解するとともに、青年期は、自己の個性と能力を伸ばして創造性を培う時期であることを記述しています（第2号）。	●第1章全て 8～12ページ
第2章	心理学的な知見の学習を通して、自己自身のみならず、他者や社会についての理解を深めるとともに、現代社会を生きる一員としての意識を喚起し、自主及び自律の精神のもと、生涯にわたってよりよく生きる姿勢を培おうとしています（第2号）。	●第2章全て 13～22ページ
第2編	人間としての自覚	
第1章	理性にもとづいて知を愛し求めたギリシアの先哲の思考を明確に記述することを通して、西洋社会の基幹をなすギリシア思想についての知識を身につけるとともに、人間として「よく生きる」とはどのようなことか、生徒自らの思考を促すように工夫しています（第1号）。	●第1章全て 24～39ページ 40ページ
第2章 第1節 第2節	一神教であるユダヤ教・キリスト教・イスラーム教について過不足なく的確に記述し、また写真・地図を豊富に掲載して、人間が「善き生」や「聖なるもの」を志向する存在であることに思いを至らせるとともに、現代の国際社会を動かす要因ともなっている宗教について、知識を身につけ理解を深めてゆくように意を用いています（第1号）。	●第2章全て 41～54ページ
第3章 第1節 第2節	東洋の人々の精神形成に大きな影響をあたえた仏教について、詳細かつ丁寧に記述することを通して、生あるすべての存在の一環として、自己を含めた人間をとらえる視座を示すとともに、生あるものの弱さや苦を受け入れる態度を培うよう配慮しています（第1号・第4号）。 また、儒家・道家を代表とする中国思想の明確な記述を通して、家族から社会へと広がりゆく他者とのつながりにおいて自己をとらえる中国思想の特色を理解するとともに、よりよい社会の実現を模索した先哲たちの思考を通して、社会の一員としての意識を喚起し、社会形成に主体的に参画しようとする態度を養おうとしています（第1号・第3号）。	●第3章全て 55～73ページ
第4章	芸術は人間に生の喜びや充実感をあたえ、生活を美しくするものであること、美を通じたコミュニケーションによって、他者と心をつ結びつけるものであることを記述するとともに、絵画など写真を多く掲載して、豊かな情操と道徳心を育むよう配慮しています（第2号）。	76～77ページ

図書の 構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第3編	現代をかたちづくる倫理	
第1章	現代社会が基本的に、西洋からはじまる近代社会の延長上にあることをふまえ、西洋近代社会が生み出した思想の「光」と「影」に対して知識と理解を深めてゆく過程に、現代の倫理的課題を解決する手がかりがあることを記述しています（第1号）。	●第1章全て 82～85 ページ
第2章 第1節	ルネサンス、宗教改革、モラリストの思想に通底する、人間の尊厳の自覚や人間尊重の原理を、写真や資料を多用しながら明確に記述し、個人の価値を尊重する態度や、個性を自由に表現して能力を伸ばし創造性を培う姿勢を育むよう配慮しています（第2号）。	●第1節全て 86～93 ページ
第2節	近代科学の誕生、経験論や合理論に代表される科学的思考の展開を通して、真理を求めて主体的に思考する態度を培うよう工夫しています（第2号）。	●第2節全て 94～101 ページ
第3節	民主社会を形成する原理である社会契約説の学習を通して、ロックやルソーらの思考が、今日の議会制民主主義にもとづく政治の基盤ともなったことを理解するとともに、民主社会を構成する一員としての意識を喚起し、公共の精神にもとづき社会の発展に寄与する態度を養おうとしています（第3号）。 また、カントやヘーゲルの思考、功利主義、プラグマティズムについての的確な記述を通して、個としての徳や幸福の追究が他者や社会のあり方とも深く関連していることを理解し、個人と社会について生徒自らの思考を促すよう配慮するとともに、自己と同様に他者を尊重し、敬愛と協力を重んずる姿勢を培うよう意を用いました（第3号）。	●第3節全て 102～118 ページ
第4節	社会主義、実存主義、現象学、アーレント、ハーバーマス、ロールズらの思考や、マザー - テレサの活動などを的確に記述することを通して、公正や正義、責任などを基軸として自己と他者、自己と社会のかかわりについて理解と考察を深め、現代における公共性のあり方を問いながら主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する姿勢を培うように配慮しています（第3号）。	●第4節全て 119～136 ページ
第5節	生命一般のなかで人間と社会をとらえるベルクソンの思考、構造主義、分析哲学の潮流などの学習を通して、これまでに学んだ西洋近代の世界観・人間観を問いなおしつつ、現代社会を生きる一員として、人間と世界について主体的に考えてゆく態度を培おうとしています（第4号）。	●第5節全て 137～144 ページ
第4編	国際社会に生きる日本人としての自覚	
第1章 第1節	第1章を通して、日本の先人たちがアジアや西欧諸国の外来文化を受容しながら、豊かな思想的・文化的伝統を築いていったことを系統的に記述しています。第1節では、和辻哲郎の風土論などを軸に、日本の風土の特徴や日本人の人間観・自然観・宗教観を記述しています（第5号）。	●第1節全て 146～152 ページ
第2節	外来思想として移入された仏教が独自の展開をたどり、高度の学問や芸術を生み出しながら人々に広く浸透してゆく過程を、聖徳太子、最澄、空海、法然、親鸞、道元、日蓮ら代表的な仏教者の思考を中心に記述し、日本人の仏教受容について、理解を深めるよう工夫しています（第1号）。	●第2節全て 153～166 ページ
第3節	儒教の伝来とその受容の過程を、林羅山、中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠など代表的な儒学者の思考を中心に記述し、明らかにする一方で、国学や懐徳堂に学んだ人々の思想、都市庶民の思想についても触れ、近世における思想の展開を多角的に記述しています（第1号）。 雅び、あはれ、幽玄、わび、さびなど日本文化における美意識を、和歌や写真とともに具体的に記述し、日本の伝統と文化の特色を明らかにしています（第5号）。 また、蘭学・洋学など西洋の思想・文化を摂取しつつ、近代的国家への道を模索した人々の思想と活動を通して、主体的に新たな社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を培うよう配慮しています（第3号）。	●第3節全て 167～175 ページ 178～179 ページ 176～177 ページ 180～182 ページ

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第2章 第1節	さまざまな状況のもとで西洋の思想・文化を受容し、その深い理解のうえに、日本人としての新たな生き方や社会のあり方を追究した人々の思想と活動を取りあげ、記述しています（第3号）。	●第1節全て 183～188 ページ
第2節	明治以降、自己の解放、貧困・差別をめぐる問題など、社会に対してさまざまな問題を提起した人々の思想と活動を通して、公共の精神にもとづき、正義と責任、男女の平等という理念のもと、自他の敬愛と協力を重んずる態度を育むよう工夫しています（第3号）。	●第2節全て 189～193 ページ
第3節	近代日本において、西洋の思想・文化のたんなる受容をこえて独自の思考を確立しようとした思想家を取りあげ、的確に記述しています（第1号）。 日本思想の学習をふり返り、受けつぐべきよさや克服すべき課題を生徒自らが自覚し、思想的・文化的伝統を尊重しながら、異なる文化・伝統に生きる人々への敬意をもつことの重要性を生徒自らが理解するよう、配慮しています（第5号）。	●第3節全て 194～197 ページ 198～199 ページ
第5編	現代における諸課題の探究	
第1章	「環境と倫理」では、人間と自然とのかかわり、地球環境問題、環境倫理、持続可能な社会の形成のための取り組みなどについて記述し、人間の生命もまた生態系の一環として存在することをふまえながら、環境を保全する姿勢を培うよう、意を用いています（第4号）。 「生命と倫理」では、生命の操作、臓器移植、治療とケアなど現代の倫理的な諸課題を記述し、生と死に対する生徒自らの思考を喚起することを通して、生命を尊重する姿勢を培おうとしています（第4号）。 「科学技術の発展とその課題」では、現代の「科学技術社会」を生きる自分自身が、科学技術の方向性を左右する責任主体であることを記述し、正義と責任及び公共の精神にもとづいて、よりよい社会の形成に参画しようとする態度を養うよう、配慮しています（第3号）。	●第1章全て 202～206 ページ 207～211 ページ 213～216 ページ
第2章	「文化や宗教の多様性と倫理」では、文化や宗教の枠にとどまらない、一人ひとりの人間がもつ多様性と、多様な人間がともに生きることのできる社会を形成することの重要性を記述しています（第3号）。 「人類の福祉と国際平和」では、人間が他者とともによりよく生きる存在であることをふまえ、国際平和と持続可能な社会の形成に向けて、尽力すべきことを記述しています（第5号）。	●第2章全て 217～220 ページ 221～225 ページ

3 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- ▶ 高校生の発達段階を考慮し、本文の叙述・表現にあたっては、平明を旨としました。また、難解な用語には適宜脚注を設け、関連性の高い語には参照ページを付すなど、内容の理解を促進するように配慮しました。
- ▶ 文字資料や写真など、本文中に掲載した図版については、生徒の興味・関心を喚起するもの、また先哲の思考や概念の理解を容易にするものを取り入れました。また、生徒の学習意欲を喚起するために、原則としてカラーで掲載しています。
- ▶ 表紙の裏には、「倫理思想史年表」と題して「古代・中世」および「近代・現代」の思想の系統的流れの概略を示し、他教科との連携をはかるとともに、生徒の学習の便宜をはかっています。
- ▶ 主体的な学習のために有効に活用できるよう、本書で取り上げる内容に関連した web 資料を適切な箇所に設置しました。当該箇所には二次元コードを示し、インターネットを通じて、原典資料や判例、グラフや図版、イラストなど、さまざまな資料にアクセスできるように配慮しています。

編修趣意書

(学習指導要領との対照表, 配当授業時数表)

※受理番号	学校	教科	種目	学年
103-118	高等学校	公民科	倫理	
※発行者の番号・略号	※教科書の番号・略号	※教科書名		
35清水	倫理703	高等学校 新倫理		

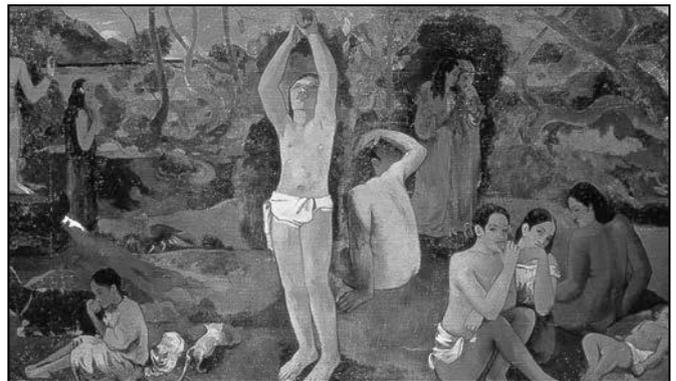
1 編修上特に意を用いた点や特色

本書は、教育基本法第2条及び高等学校学習指導要領の趣旨にもとづき、公民科、地理歴史科に属する各種目との関連を考慮しながら、各編で扱われる内容の関連性に留意しつつ全体としてのまとまりを工夫し、以下のように編修しています。

① 学習の目的を的確に提示

▶ 「倫理」という種目に対する高校生の興味や関心を喚起してゆくため、各章の冒頭に学習内容と関連の深い写真やリード文を配置してスムーズな導入をはかるとともに、なぜその単元を学ぶのか、学習の目的を明確に提示しています。

▶ p. 4 写真(「われらどこから来たのか われら何であるのか われらどこへ行くのか」ゴーガン画)



② 思考を深めてゆく正確な本文記述

▶ はじめて本格的に「倫理」を学習する生徒が、基礎的・基本的な知識を確実に習得し、先哲の思考に対する理解を深めるとともに、自ら思考する態度を育ててゆくことができるよう、本文の記述・表現に際しては、正確かつ平明を旨としています。

▶ 生徒の発達段階を考慮して、紙面構成やレイアウトを工夫し、派生的な知識や事項は補説の扱いとする、難解な用語には脚注を設けて具体的に説明する、関連性の高い語には参照ページを付すなど、内容の理解を促進するために、本書全般にわたって配慮しています。

▶ 生徒が自ら思考することのきっかけとなるように、学習内容と関連する地図や図表、絵画をはじめとする写真などを豊富に掲載しています。



▶ p. 24 第2編 第1章

第2章 世界と人間をめぐる探究

今日、世界のほとんどの国では、法的に人間として個人の自由・平等が保障されている。その歴史にあるのは、人間は人間であることにおいて、一人ひとりがけがらぬ権利をもつという、人間尊重の前提である。しかし地方、現代でも、人間・民族による差別といった不平等なことが起こっている。偏しての人間の尊厳を擁護する原理は、他者への配慮をない自己中心主義を生み、また偏しての人間を過度に尊重する立場は、人間以外の自然界の生命を人にも操作対象へと転換し、偏った人間中心主義を生む。この意味では、西洋の近代精神が生み出した光と影を見えながら、人間と社会、そして世界についての視察を深めよう。

1 ルネサンスとヒューマンイズム

新たな人間観の誕生
近代の初頭、14世紀の北イタリアから、ギリシア・ローマの古典文化の復興をめざす。文化の革新運動が始まった。この運動はルネサンス（文芸復興）とよばれる。あるがままの人間性を肯定し、自己の生き方や求めるべき価値を、みずからの感情や理性によって決定する人間尊重の精神は、本来は「再生」を意味する。このルネサンスの運動に源を発する。

先駆者であるダンテは「神曲」をあらわし、人間の罪を告諭、魂の救済

① ダンテの神曲の人物像（ミケランジェロ）
ミケランジェロの人物像（ミケランジェロ）
ミケランジェロの人物像（ミケランジェロ）

pp. 86~87 第3編 第2章

第1章 日本の風土と精神文化

私たちが生きる現代日本の社会は、西洋に由来する近代的な価値観をおもむきで成り立って成立している。しかし、一方で私たちは、祖先たちが培ってきた豊かな文化的伝統を育んで生きている。私たちは生き方や考え方は、日本の風土や歴史のもとで育まれたものもあれば、海外から学んだものもふくまれている。第4章では、私たちの祖先が、何のそとをめぐりながら自己を形成してきたのかを振り返りながら、国際社会に生きる日本人としてのあり方を探究してゆく。

1 風土と日本人の生活

日本の風土
日本は、国土のすべてが大小の島々からなる島国である。森におおわれた山地と小さな平地が複雑に入り組み、海岸線も変化に富んでいる。国土の大半は温帯モンスーン気候に属し、雨と日光に恵まれ、四季の変化が明瞭にあらわれる。ことに夏はモンスーンにもなる高温多湿は植物の生育に適しており、人々は古来、木質建築を中心とする生活を営んできた。

思ふをたらず豊かな自然は、同時にまた、おそるべき自然をふるまふ自然でもある。四季の推移のなかでしばしば襲ってくる台風・集中豪雨・大雪は、

pp. 146 第4編 第1章

pp. 86~87 第3編 第2章

pp. 146 第4編 第1章

③ 時代や地域を超えて、思考を促すテーマページ

- ▶ 「対話」「超越的存在」「幸福」「ことば」「時間」など、普遍的なテーマを9つ設定しています。
- ▶ テーマページの学習を通し、時代や地域の枠を超えて生徒が主体的に考え、自らの思考を深めつつ、それをことばに表現してゆく態度を育むよう、配慮しています。
- ▶ テーマページと本編の内容を関連させて学習することで、さらに理解を深めることができます。

＜テーマページ「思索の広場」一覧＞

- 1 対話：思考の可能性をひらく
- 2 美をめぐる判断：美と倫理とのつながり
- 3 超越的存在：東西の神
- 4 ルネサンスの神秘主義と近代科学：占星術・自然魔術・錬金術
- 5 幸福：幸福とは何か
- 6 ことば：ことばとともにあること
- 7 死者の霊魂の行方：世界信仰をめぐる
- 8 時間：流れと永遠
- 9 自然：生命的自然と物質的自然

死者の霊魂の行方

死後も意識は消え去ることなく、彼方の世界におもむいたり、生まれ変わったりして存続するという考えは、古くは、洋の東西を問わず存在した。「古事記」における黄泉の常世は、山中や海上に設定された他界であった。

① 『出雲国風土記』によれば、とある海辺の磯（岸壁）に洞窟があり、その奥にさらに穴があって、黄泉への入り口だと信じられた（『出雲の郡字書』）。平安時代初期の説話集『日本書紀』には、輪廻転生の話が取られている。よとしたりして自分の前世を知った人が、輪廻に落ちた家を訪ね、前世の記憶を語り、前世の親と再会したという（上巻 第18話）。

② 浄土教の広がりとともに、さまざまな浄土教信仰が盛行し、他界イメージも大きく変容した。『西遊漫筆』は、説法する阿彌陀仏を中心に、徳園や蓮池に集う無数の菩薩を描き、荘厳な浄土の景観を表現する。他方、庶民の他界観をよく示すのは『類聚雑学十景図』（『類聚雑学十景図』）である。図の上方の平地、向かって右から

③ 左に、出生から死にいたる人の一生が描かれ、その先には閻魔王の存（役）が待ち受ける。さらにすすむと、六つの迷いの世界と四つの悟りの世界があり、どこに行くかはみずから心次第と示すことが、中央の「心」の字で示される。

④ 『類聚雑学十景図』は、金瓶梅詞話や西遊漫筆など、中国の古典文学の要素を多く取り入れ、浄土教の要素を多く取り入れた。浄土教の要素を多く取り入れた。浄土教の要素を多く取り入れた。

pp. 165~166 思索の広場7 死者の霊魂の行方

地獄の柱

西洋に目を向けると、輪廻の観念をもたないキリスト教においては、すべての死者が、歴史の終末時にいったん復活させられ、最後の審判を受けると説く。正しい人が天国に入り、神のもとで永遠の幸福を得る一方、大罪を犯した人々は地獄に墮し、さまざまな苦を受け、永遠に罰せられる。

カトリックではさらに、小さな罪を犯した人々のための他界、煉獄の存在が考えられるようになった。そこで火による責めを受け、罰められた人々は、天国に入ることができる。煉獄における道徳的向上と、煉獄にいたる人々の軽減を願い、この世の人々は祈りや苦行を行うようになった。

ダンテの長編叙事詩『神曲』は、暗い森の中に迷い込んだ主人公が、七日にわたって地獄・煉獄・天国をめぐる、ついに神の愛を見るという至福に達するまでを描いている。中世キリスト教の世界観を明確に表現したこの作品は、文学・美術などの、西洋文化に大きな影響をおよぼした。

浄土教やキリスト教の他界観は、善行は報われるという社会的道徳観と深く結びついている。また、報いられる死を指し、その魂の再生を願うのは、古今東西を問わず普遍的な心情であらう。他界の観念は、どんなときでもよく生きることを希望を手放さずとする、人々の思いから生み出されているのである。

pp. 166 第4編 第2章 思索の広場7 死者の霊魂の行方

対話

人間や世界のあり方の根本を深く考えようとするとき、対話というのは私たちにあって、きわめて重要な手法であり続けている。たとえ、ソクラテスの哲学がまさに対話によって成り立っていたという事実も、この点をともよくあらわしているといえるだろう。

ソクラテスが街頭で実践した問答法は、おおよそ次のような特徴がある。

- ①ある問題（幸福とは何か、善とは何か、など）について、相手がいかに語り持っているイメージを、主眼として明確化する。
- ②相手の主張を正面からは否定せず、代わりに、問答に関連する別の主張をいくつかがあがり、相手の同意を求める。
- ③いま自分が同意したくつかの主張と、自分の元来の主張が整合していないことを、相手に気づかせる。
- ④その気づきを踏まえ、相手が自分の主張の矛盾やゆきまりをすんで認め、問題についてあらためて自分で深く吟味していくように促す。このように、ソクラテスが市井の人々と交した対話は、たんに自分の主張を述べるとか、相手を論破するといったことを目的とするのではなく、むしろ、相手の発することばをよく聞き、そのことばを免責させてゆくことが出発点となる。そして、相手が自分の考えの甘さや未熟さを自覚し、自分で新たな考えを生み出してゆく手助けとなることを目的としている。それゆえ、ソクラテスの問答法は辯論術ともよばれるのである。

対話は、自己と他者の新しい思考の可能性をひらく創造的な営みである。ひとりでも深く悩んでいる問題はわからなかったのに、誰かに質問や対話をしていくなかで、「ああ、この問題はそういうことだったのか」と自分で気づいた経験はないだろうか。誰かに向けて話したり書いたりしていくなかで、自分では思いつかなかったアイデアが出てきた経験はないだろうか。「考えるとは、誰かに向かってゆくこと」という言葉だ（『哲学の発見』）。現代の哲学者ウィットゲンシュタインがこう語るように、私たちがことばで何かを考へて意味するということの本質は、誰かに向かってゆくこと、誰かとともにすることなのである。

p. 40 思索の広場1 対話

pp. 165~166 思索の広場7 死者の霊魂の行方

p. 40 思索の広場1 対話

2 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所	配当 時数
序 人間とは何か		4～6 ページ	
第1編 現代を生きる自己の課題	A 現代に生きる自己の課題と 人間としての在り方生き方		(7)
第1章 個性的な主体としての自己	(1) 人間としての在り方生き方の自覚		3
1 心の機能と個性 2 パーソナリティの形成と「私」		8～10 ページ 11～12 ページ	
第2章 心と行動をめぐる探究			4
1 人間の活動を支える心 2 認知のしくみ 3 生涯にわたる発達		13～16 ページ 16～18 ページ 19～22 ページ	
第2編 人間としての自覚			(18)
第1章 哲学の始源：ギリシア思想	▲ p. 8 写真 (スマートフォンで 会話をする高校生)		6
1 神話から哲学へ—自然哲学者たち 2 知と徳をめぐる問い—ソクラテス 3 理想主義的なあり方—プラトン 4 現実主義的なあり方—アリストテレス 5 幸福をめぐる問い—ヘレニズムの思想		24～27 ページ 27～31 ページ 32～34 ページ 35～37 ページ 37～39 ページ	
思索の広場 1 対話：思考の可能性をひらく		40 ページ	
第2章 唯一神の宗教 ：キリスト教・イスラーム教			
第1節 愛の教え—キリスト教 1 ユダヤ教 2 イエスの思想 3 世界宗教への展開	▲ p. 31 写真 (「毒杯を手に、 弟子たちに別れを告げる ソクラテス」)		3
第2節 戒律と平等の教え—イスラーム教	▶ p. 52 写真 (『クルアーン』)		41～43 ページ 43～46 ページ 46～49 ページ
第3章 東洋思想の源流：仏教・儒教			6
第1節 智慧と慈悲の教え—仏教 1 バラモン教 2 仏陀の思想 3 仏教とその後の展開		55～57 ページ 57～61 ページ 61～64 ページ	3
第2節 仁と礼の教え—儒教 1 儒家の教え 2 儒教の展開 3 道家の思想		▲ p. 62 写真 (サーンチーの仏塔)	65～68 ページ 68～71 ページ 72～73 ページ

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所	配当 時数
第4章 芸術と倫理		74～77 ページ	1
思索の広場 2 美をめぐる判断：美と倫理とのつながり		78～79 ページ	
思索の広場 3 超越的存在：東西の神		80 ページ	
第3編 現代をかたちづくる倫理			(23)
第1章 近代の成立		82～85 ページ	1
第2章 世界と人間をめぐる探究			22
第1節 人間の尊厳 1 ルネサンスとヒューマニズム 2 宗教改革と人間の内面 3 人間の偉大と限界		86～88 ページ 89～91 ページ 91～93 ページ	2
第2節 真理の認識—経験論と合理論 1 近代科学の思想法 2 事実と経験の尊重—ベーコン 3 理性の光—デカルト		94～95 ページ 96 ページ 97～100 ページ	3
思索の広場 4 ルネサンスの神秘主義と近代科学 ：占星術・自然魔術・錬金術	▲ p. 86 写真（ダンテ、『神曲』の詩人）	101 ページ	
第3節 民主社会と倫理 1 社会契約説と啓蒙思想 2 人格の尊厳と自由—カント 3 自己実現と自由—ヘーゲル 4 幸福と功利 5 創造的知性と幸福		102～106 ページ 107～110 ページ 111～113 ページ 114～115 ページ 116～117 ページ	6
思索の広場 5 幸福：幸福とは何か	▲ p. 94 写真（ニュートン）	118 ページ	
第4節 現代社会と個人 1 資本主義社会への批判 2 人間存在の地平—実存主義 3 世界と存在そのものへ—現象学 4 公共性と正義 5 社会参加と他者への奉仕		119～120 ページ 121～123 ページ 124～128 ページ 129～134 ページ 135～136 ページ	7
第5節 近代の世界観・人間観の問いなおし 1 理性主義への反省 2 言語論的転回 3 科学観の転換	▲ p. 109 写真（カント）	137～140 ページ 141～142 ページ 142～143 ページ	4
思索の広場 6 ことば：ことばとともにあること	▶ p. 133 写真（アメリカの公民権運動）	144 ページ	
	▶ p. 130 写真（アーレント）		

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所	配当 時数
第4編 国際社会に生きる日本人としての自覚	(2) 国際社会に生きる日本人としての自覚		(17)
第1章 日本の風土と精神文化	 <p>▶ p. 155 写真 (延暦寺根本中堂)</p>		11
第1節 日本人の人間観・自然観・宗教観			2
1 風土と日本人の生活 2 日本における神の観念 3 神と仏の出会い		146～149 ページ 149～151 ページ 152 ページ	
第2節 日本人の仏教受容			4
1 古代仏教の思想 2 鎌倉仏教の思想		153～157 ページ 158～164 ページ	
思索の広場7 死者の靈魂の行方 : 他界信仰をめぐって	 <p>▲ p. 176 写真 (竜安寺の石庭)</p>	165～166 ページ	
第3節 近世社会の思想			5
1 儒教の伝来と朱子学 2 陽明学 3 古学 4 国学と日本文化 5 近世庶民の思想 6 近代的国家への道		167～169 ページ 169～170 ページ 170～173 ページ 174～177 ページ 178～179 ページ 180～182 ページ	
第2章 日本の近代化と人々の生き方			6
第1節 西洋近代精神の摂取		 <p>▲ p. 181 写真 (『解体新書』の扉絵)</p>	
1 啓蒙思想家の活動 2 国家と個人の衝突	183～185 ページ 185～188 ページ		
第2節 近代的個人の自覚			2
1 近代的自我の成立と個人主義 2 社会改革の思想	189～191 ページ 191～193 ページ		
第3節 主体的な生き方と価値観の模索			2
1 近代日本の哲学者 2 近代日本の思想傾向への反省 3 現代日本と私たちの課題	194～195 ページ 196～197 ページ 198～199 ページ		
思索の広場8 時間：流れと永遠		200 ページ	
第5編 現代における諸課題の探究	B 現代の諸課題と倫理		(5)
第1章 自然や科学技術をめぐる諸課題	(1) 自然や科学技術に関わる諸課題と倫理		3
1 環境と倫理		202～206 ページ	1
2 生命と倫理		207～211 ページ	1
思索の広場9 自然：生命的自然と物質的自然		212 ページ	
3 科学技術の発展とその課題		213～216 ページ	1
第2章 社会や文化にかかわる諸課題	(2) 社会と文化に関わる諸課題と倫理		2
1 文化や宗教の多様性と倫理		217～220 ページ	1
2 国際平和と人類の福祉		221～225 ページ	1
		計	70